

第 143 話＜教師の伝説＞の要約と参考資料

第 143 話＜教師の伝説＞の要約

1920 年亜ヒ焼き開始に端を発した土呂久の煙害は、地域の事件として報道されてきましたが、1971 年 11 月 13 日西日本新聞の特報によって九州で知られるようになりました。その記事誕生の話。「山奥に埋もれていた公害を告発した教師の伝説」誕生の話を紹介します。

第 143 話＜教師の伝説＞の参考資料

1 4 3 - 1 岩戸小教師による土呂久公害調査報道のいきさつ

西日本新聞安部裕人記者の話（1986 年 8 月 31 日聴取＋同年 9 月 5 日消印の手紙）

私が延岡にいた当時（昭和 45 年～47 年 2 月）、公害問題が焦点だった。見立鉾山跡で鉾山廃棄物が置いてあるのを見たことがあった。土呂久には行ってなかったが、注意はしていた。熊本総局のデスクより「営林署担当の記者が、岩戸小学校の先生たちが土呂久の公害問題をまとめている、と聞きこんできた。参考までに」という連絡がきた。翌日、岩戸小学校へ行った。齋藤先生ら 5、6 人が一室に集まり、ガリを切って 20～30 ページの小冊子にまとめていた。齋藤先生から取材を始めたが、問題の大きさに驚くとともに、調査の概略を理解するのにかなり手間取った。その日のうちに写真を撮っておこうと、鉾山事務所跡付近と川淵の農家 2 軒を訪ねた。

資料を借りて帰った。想像を絶する内容。印象的なのは一家 7 人死滅の話。聞き取り調査なので記事にしにくい。鉾山はいつの時代に操業したのか？ 経営の関係者は？ 発生はいつごろ？ 裏付け資料を整えるために、高千穂町役場、県の工鉾課に電話、土呂久に出かけて付近住民の話聞いた。かなり年のいった主婦と老人に会って、鉾山公害のひどい時代の話聞いた。11 月 9 日、仕事が一段落した夕方、鶴江さんのところに出かけた。身の上話を聞かせてくれた。娘 4 人が嫁いで一人暮らし。歌を見た。人生の辛さをまぎらわしているのだな、と感じた。

発表前日。齋藤先生が延岡に降りてきて記者会見。内容を説明した時間は、延岡の支局長連中は漁協の漁業補償問題で取材をしていて不在。会見に出たのは 2 人の若手記者。私は漁協に行っていたが、会見の前に、女房経由で「各社に連絡します」と言われて、「どうぞ」と答えさせました。もう待たなしです。その夜、私が支局で早版用の原稿を書いていたとき、毎日新聞の若手記者がやってきて、「安部さん、どうしますか」と聞くので、「書いた方がいいよ」と答えたことを覚えています。晩飯のあと、翌日の夕刊用ルポにとりかかり、ほとんど徹夜近くなった。

私が赴任する前から、夕刊デイリーが土呂久の公害を書きよつたらしい。騒動が終わっ

たあとで、夕刊デイリーが、土呂久の公害はずっと前からとりあげてきた。なにも、いま新しい問題ではないんだ、という記事を書いたことがある。

最初に取材したとき、土呂久だけではないはずだ。日本には無数に鉱山があり、明治・大正時代から各地で掘って、残滓が垂れ流された。日本全国、山奥にはいろんな鉱山があるので、土呂久はその一つにすぎない。水俣病・イタイイタイ病・四日市ぜんそくがあるのに、土呂久が発掘されなかったのは、山奥の鉱山の病気だったからだ、新しいケースの公害病だ、と考えていた。土呂久はマスコミで脚光を浴びたが、浴びていないところはどくなるのか？ 私が特ダネをとったとかでなく、日本全国の鉱山病の被害を発掘するのは、これからが第一歩だ。

井口勝夫さんからのショートメッセージ（2022年1月25日）

齋藤先生についての記憶といえば、西日本新聞に土呂久鉱毒の記事が大きく載る前日、すでに延岡支局に転勤していた小生を、住民アンケート結果を持って訪れ、「明日の西日本の朝刊に記事が載ります。土呂久の鉱毒の話は高千穂時代の井口さんの記事を見て知り、いろいろ教えてもらいました。その義理がありますので」と。小生は宮崎支局のデスクと対応をどうするか相談し、最終的には、アンケートだけでは事実関係は確認できないと、その日は記事を見送った記憶があります。小生にとっては苦い思い出の一つです。

143-2 公害告発を報道した新聞記事

1971年11月13日西日本新聞社会面トップ

「亜ヒ酸鉱害明るみに / 40年間も“死の煙” / 住民の3割に症状 / 失明やからだに斑点」

〔延岡〕 宮崎県西臼杵郡高千穂町の旧中島鉱業土呂久（とろく）鉱山で、亜ヒ酸鉱害があり、被害は大正7年くらい幼児を中心に続発、いまなお住民269人のうち27.5パーセントの74人が気管支炎など自覚症状を訴えている事実が宮崎県教組西臼杵支部岩戸小分会（荻原紘一会长）の斉藤正健さん（28）＝岩戸小教諭＝らの調べでわかった。奥地で人目につかないまま40余年間も住民が亜ヒ酸鉱害にさらされ続けていたという。これは、同地区の鉱毒被害に目をつけ、土呂久鉱山一帯4ヘクタールの谷あいに住む55世帯269人にアンケート調査して突きとめた。同分会は13日、宮崎市の小戸小で開く教育研究集会で、この調査結果を発表する。

（略）

現在269人の住民のうち眼病や胃腸炎、気管支炎などの病気にかかっている人は74人にのぼり、なかには失明した人、ヒ素中毒特有の黒いアズキ大の斑点がからだ一面に残っている人もいる。植物調査では樹齢60年の杉の年輪が亜ヒ酸製造の消長をくっきりと示しているという。

同分会が鉱毒調査に乗り出したきっかけは、同地区の小、中学校の児童、生徒が他地区

よりとくに体力が劣り、気管支炎などの病気が多いのに気付いたため。被害者の声を録音、スライド写真などで鉍毒説を立証した同分科会は、12日までに3回、地元の坂本来・高千穂町長に公害防止を訴え、同町長は「土呂久地区住民の健康診断を実施する」と約束している。

(談話略)

1971年11月14日朝日新聞宮崎版トップ

「いまも尾をひく鉍害 / 岩戸小斉藤教諭教研集会で発表 / めだつ呼吸器の病気 / 県 住民の健康診断を検討」

西臼杵郡高千穂町、岩戸小学校の先生15人は、地域の鉍害問題を2カ月かかって調べ、13日、宮崎市で開かれた県教組主催の教育研究集会で斉藤正健教諭(28)が発表した。この調査によると、硫ヒ鉍を焼いて亜ヒ酸をつくっていた高千穂町土呂久、土呂久鉍山の煙害のひどさがうかがえる。県も13日、関係の課で話合い、15日にも県公害課が中心になり高千穂保健所、高千穂町などと合同で、とりあえず現地調査することを決めた。公害課は、アンケート調査、地元の声などを聞き、さらに住民の健康診断なども検討する方針。

(略)

斉藤教諭らの調査は9月から2ヶ月間、土呂久地区の56世帯、269人を対象に①児童、生徒の体位、体力②住民の年齢構成③死亡の原因、病気の状態④鉍害に対する意識アンケートをした。

これによると土呂久地区の児童、生徒は、他地区に比べ一般に体位、体力が劣り、学年が進むにつれてその傾向が目立っている。年齢構成比は30歳までが56%を占め、30歳以上が極端に少なくなっている。亜ヒ酸製造が始った大正7年から昭和28年までの死亡原因は結核がトップで22%、いまでも住民の25%が目や呼吸器官などをいためていると、アンケートに答えている。

(略)

土呂久鉍山の鉍害問題は、地区住民への影響があるといわれながら調査はまだ一度もなされていない。しかも休鉍になってからは被害の激しかったころの模様もしだいに忘れ去られようとしているときだけに、この調査に寄せる当局や地元民の関心は深い。

1971年11月14日宮崎日日新聞社会面トップ

「こわい亜ヒ酸煙害 / 目や気管支に異常 / 53年間も悲惨な生活」

西臼杵郡高千穂町岩戸の旧中島鉄鉍土呂久鉍山の亜ヒ酸による煙害で地区住民は53年間苦しみ続けている。同町岩戸の岩戸小学校教諭斉藤正健さん(28)は13日午後1時から宮崎市・小戸小学校で開かれた県教組主催の第21次教育研究集会人権と民族の教育分科会で「公害と教育」と題して、その悲惨な実情を発表した。県教組西臼杵支部岩戸小分会(荻原紘一分会長、15人)が2ヶ月にわたって、中学生とその父兄などからア

ンケート調査したもので山奥の一集落 56 世帯 269 人中 74 人もの人が今なお目や気管支の異常を訴えている—という調査結果が注目される。

1 4 3 - 3 齋藤正健教諭の活躍を報道した新聞記事

1971 年 11 月 18 日宮崎日日新聞「木曜対談 年輪は証言する / 失われた土呂久の命」

対談：齋藤正健（高千穂町岩戸小教諭）×平嶋周次郎（宮崎日日新聞編集局次長）

平嶋 この結果を「皮膚で感じた公害」から一歩進めるためには、科学的な裏づけがいりますね。

齋藤 私たちでできるのは、ここまでの調査です。あとは専門的に技術者にやっていただきたい。しかし見てください。この杉の年輪は（年輪のカラー写真を示す）亜ヒ酸の焼却作業が行なわれていたころ、成長がとまっていたことを示しています。少しずつは成長しているが、その時期の木質はボロボロで、材木として価値がないと木材業の人がいっています。ひどいものなんです。年輪はウソをつかない。動かぬ証拠ですよ。

平嶋 それほどの煙害があったのに地元が騒がなかった、企業が手を打たなかった、監督官庁が 53 年間も知らぬ顔をしていた—とは信じかねますね。

齋藤 地元には和合会という組織があります。おそらく鉱山の歴史とともにできたものでしょうが、その議事録では、大正 7 年ごろに亜ヒ酸の作業が始まってからあと、たびたび煙害を訴えたいが実を結んでいない。当時、公害問題が注目されていなかったから、不満が押しつぶされ、犠牲をしいられ続けてきたんです。

平嶋 昭和 39 年以来、土呂久は休山していますね。すると煙害はその時点で消えたのでは…。

齋藤 作業は行なわれていませんが、つめ跡はあまりにも大きい。現に膨大な量の鉱さいが残っているし、そのあたりから流れた水で住民は生活し、子供たちは泳いでいたのです。いまでも悪臭の漂う鉱さいのヤマで、バレーボールなどしている状態だった。調べれば調べるほど恐ろしいですね。

平嶋 教師の仕事と、こんどの研究活動について…。

齋藤 基本は人命尊重です。人命尊重のために私どもはこんどの調査をやったのだし、これは組合活動の目標に一致すると思う。公害を克服することは人類にとって大変なことでしょうが、みんなが力を合わせてやらねばならん。また一致協力すれば、公害克服は可能ではないかと思うのです。

1971 年 11 月 20 日宮崎日日新聞「53 年目の告発」第 2 回「怒りのレポート」

教室いっぱいに広げられた「死亡者の死因比較表」。青っぽい色のヒ鉱、記録写真。青年教師の口は心なしかふるえてみえる。恐ろしい土呂久の実態が次々に明らかにされ、参加者から「ひどい」という声もれた。

「イヤなおいをかぎながら、ズリの不安におののきながらも鉱山跡はほったらかし。

県など行政当局は何もしてくれない。53年間、住民の声は無視された。一度も土呂久で健康診査はされていない」。これまで土呂久に目をつぶり続けてきた行政当局への告発はきびしかった。(略)

「福岡鉦山保安監督局、会社、県、岩戸村(現高千穂町)にも陳情した。しかし、なんのことはなかった」。告発は怒りに満ちている。そこに53年間の^{おんねん}怨念が一気にふき出した感じである。(略)

齊藤教諭は来年1月、山梨県甲府市で開く教育研究全国集会に出席、調査レポートを発表する。土呂久住民の声は、53年という長く暗い歴史のトンネルを抜け、いま全国に向かっても大きく発せられようとしている。

「記録・土呂久」P446—447より

地元宮崎日日新聞もいくつかの連載で土呂久問題を訴えた。まず告発当時の71年11月18日、発表した齋藤正健教諭に編集局次長の平嶋周次郎が「木曜対談」をおこない、次の日から6回、南村正明が「53年目の告発」で行政の責任感のなさ、怠慢さ、冷淡さを訴え、砒素と病気の因果関係の解明を期待する記事を書いた。